

P. B. シェリーの「西風に寄せるオード」と シビルの葉をつなぐもの —案内役としてのメアリ・シェリー¹

池田景子

序

スチュアート・カラン (Stuart Curran) によれば、1818年秋の初めから20年初めが P. B. シェリー (P. B. Shelley) にとっての「驚異の年 (annus mirabilis)」である (preface xiii)。イギリスを離れイタリアへと渡った P. B. シェリーの想像力に新たな火がともされ、彼の才能が開花した時期である。まさにこの時期、1819年10月20日から25日に頌歌「西風に寄せるオード」(“Ode to the West Wind”) は執筆され、詩劇『縛りを解かれたプロメテウス』(*Prometheus Unbound: A Lyrical Drama in Four Acts*) とともに1820年に出版される。したがって、詩的想像力に対する P. B. シェリーの信頼に陰りが見え始める後期作品と比べて、「西風に寄せるオード」は詩的想像力を肯定的に捉え、そこに社会を変革する力を見出そうとする作品とされてきた。² このように「西風に寄せるオード」では詩的想像力への P. B. シェリーの信頼が表明されている一方で、P. B. シェリーの死後1824年から25年に執筆されたメアリ・シェリーの小説『最後の人間』(*The Last Man*) は P. B. シェリーやバイロン (Lord Byron) などを登場人物のモデルにしてはいるが、ロマン派的想像力の挫折を描いた作品とされてきた傾向がある。³ つまり、『最後の人間』と「西風に寄せるオード」は、執筆年が離れており、テーマも真逆である。ところが、興味

深いことに P.B. シェリーの「西風に寄せるオード」とメアリ・シェリーの『最後の人間』は西風やばら撒かれた葉、未来の預言を託したシビルの葉 (Sibylline leaves) など、比喩やモチーフ、イメージが複数オーバーラップしており、単なる偶然とは言い切れない。先行研究は概ね「西風に寄せるオード」がメアリ作品における自然描写や心理描写への影響を認めている。⁴ 特にアン・マクウィア (Anne MacWhir) は、『最後の人間』は風がもたらすペストのモチーフを「西風に寄せるオード」から引き継いで、『最後の人間』が「西風に寄せるオード」における風の肯定的影響力をネガティブなものに反転させていると解釈する (36-37)。⁵ しかし、本論考では、「西風に寄せるオード」と『最後の人間』におけるモチーフやイメージの類似性を検証することで、『最後の人間』はロマン派的想像力の挫折のみを描いているのではなく、P.B. シェリーの詩的生命力を再生させる<案内役 (conductor)>であることを立証する。同時に、「西風に寄せるオード」もメアリ・シェリーの想像力に火をともし、作家生命を新たにして『最後の人間』を作り出す一端となっていることを考察したい。本稿では便宜上、P.B. シェリーとメアリ・シェリーをパーシーとメアリのよう呼んでいく。

1. 「西風に寄せるオード」における西風と枯葉

まず、「西風に寄せるオード」と『最後の人間』におけるモチーフやイメージの類似性を検証する前に、「西風に寄せるオード」における西風の力と枯葉の意味を確認したい。1819年10月にパーシーはフィレンツェへと居を移した際、アルノ川 (the Arno) 沿いを散策時に、西風が自然界に季節の変化をもたらす様子を目にする。当時の博物学的知識や気象学的知識を動員させ、自然における季節のサイクルと詩人の想像力が世界へ変革をもたらす様を重ね合わせて描いていたのが、「西風に寄せるオード」である。本詩は5つのパートでできており、各パートはテルツァ・リーマの4連に帰結のカプレット1連とい

う14行のソネット形式で構成されている。この5つのパートをパーシーは stanza と呼んでいるため、本稿でも各パートを「連」と呼ぶことにする。⁶ 第1連の冒頭で、詩人は西風に汝と呼びかけ、直後に続く関係代名詞節の中で、西風の力には自然界に冬の到来（破壊）と同時に冬の先に春の到来（再生）をもたらす両義性があることを描く。ここでの西風は「荒れ狂う精霊（Wild Spirit）」であり、「目には見えない存在（unseen presence）」だが、あらゆる場所に働きかける空靈的存在である（“Ode to the West Wind” 1.13, 2）。⁷ その力は宇宙の原理や必然性であり、自然界における因果の連鎖—冬（死）から春（再生）への季節のサイクル—を促す。⁸ つまり、西風は「破壊者であると同時に保存者（Destroyer and Preserver）」と説明されるように、その破壊は変化をもたらす力であり、事物を消滅させてただ無に帰すだけではない（“Ode” 1.14）。⁹ ゆえに、「西風に寄せるオード」の第1連において西風は木から葉を引きはがして、葉を「死んだ（dead）」状態にすることで変化をもたらす（“Ode” 1.2）。しかし、その枯葉は消滅して無に帰するのではなく、風によって「冬の苗床（wintry bed）」へ運ばれた種子にとって養分となり、その種子が春の植物として再生するのを促す（“Ode” 1.6）。¹⁰ このような西風と枯葉の関係は本詩において通底するモチーフである。西風から同様の影響を受ける自然の事物は、第2連で大空の雲、第3連で地中海となる。これらの事物は一見それぞれ独立しているようだが、第4連で「枯葉（a dead leaf）」、「俊敏な雲（a swift cloud）」、「波（A wave）」が同列に扱われていることから第2連の雲と第3連の地中海はすべて枯葉の比喩が重層化したものである（“Ode” 4.43, 44, 45）。¹¹

この枯葉の比喩は第4連と第5連でも踏襲され、この2連で枯葉の比喩的意味がさらに深まり重層的になっていく。その重層化は次の3段階に分けることができる。まず、第4連でパーシーは枯葉を詩人に喩え、枯葉と西風の関係が詩人と西風の関係とパラレルになる。したがって、第1連に見られる枯葉と同様に、詩人は第4連と第5連で西風の影響を受けて精神的死と再生を遂げることになる。¹² 第4連で詩人は枯葉のように西風の影響を受けて空へ舞い上が

ることを望むが、時が課す重量のせいで詩人は「人生の茨 (the thorns of life)」に落下し、血を流す (“Ode” 4.54)。このように第4連で挫折 (死) を経験した詩人は、第5連で戦略を変えて再生する。詩人は地面に足を下した森になり、その中を西風が吹き抜けていく。こうすることで、西風の息吹、すなわち「秋という存在から出された息吹 (breath of Autumn’s being)」が詩人に吹き付け、詩人は「豎琴 (lyre)」のように「深い秋の音色 (a deep, autumnal tone)」を奏でる (“Ode” 1.1, 5.57, 5.60)。このように第4連から第5連にかけて詩人が精神的死と再生を遂げることで、枯葉の比喩的意味も重層性が増していく。第4連で枯葉は詩人自身に喩えられていたが、第5連において葉 (leaves) は詩人の一部、その「思想 (thoughts)」となる (“Ode” 5.63)。このとき、詩人の思想を表すのは「言葉 (words)」であることに加え、leaf の意味には<葉>だけではなく<本の頁>もあることを考慮に入れると、本作品において枯葉は詩人の思想を記した作品を指すようになる (“Ode” 5.67)。¹³ 詩人の思想 (アイデンティティ) は紙に書かれた途端に、詩人の肉体を離れ「死んだ思想 (dead thoughts)」となるが、詩人の思想は死んで消滅するのではない (“Ode” 5.63)。¹⁴ むしろ、詩人の思想は西風の「魔力 (incantation)」が吹き込まれた言の葉となって、世界を啓発する (再生させる) 力を持つのである (“Ode” 5.65)。ここでの「魔力」は、第1連で枯葉を追い立てていく西風を喩えた「呪術師 (an enchanter)」と対応している (“Ode” 5.65, 1.3)。したがって、第1連で描かれた西風の魔力 (精神) は、第5連で詩人の中に取り入れられ、その言の葉の中に吹き込まれることになる。つまり、詩人の言の葉には世界の腐敗を取り壊して理想の社会を生み出す力、世界の冬 (死) を導いて春 (春) へと変化させる力が吹き込まれるのである。ゆえに、詩人の言の葉は秋の音楽であり、これから世界に変化をもたらす啓発していく「預言 (a prophecy)」である (“Ode” 5.69)。このとき詩人による預言の葉は、作品内における詩人の言葉から「この韻文 (this verse)」、すなわち「西風に寄せるオード」そのものへと指示対象を広げる (“Ode” 5.65)。そうすると、「目覚めぬ (unawakened)」世界を啓発する

預言の〈葉〉は、パーシーの「西風に寄せるオード」である(“Ode” 5.68)。このように「西風に寄せるオード」の第4連と第5連において、枯葉の比喩は、まず詩人、次にその作品(詩)、最後に「西風に寄せるオード」を指すように、比喩的意味が重層化するのである。

2. 火花と灰のモチーフ

先行研究において、「西風に寄せるオード」における枯葉の比喩的意味はさらに重層化する。ジェイムズ・チャンドラー(James Chandler)とポール・H・フライ(Paul H. Fry)は、「西風に寄せるオード」における葉が未来の預言であることから〈シビルの葉〉でもあると解釈する。¹⁵ だが、パーシーは「西風に寄せるオード」において、預言能力があるとされた古代の巫女シビラ(Sibyl)への言及はしておらず、チャンドラーやフライの解釈には飛躍があると考え人もいるであろう。しかし、彼らの解釈が「西風に寄せるオード」における枯葉に新たな意味を発見していると捉えた場合、枯葉をシビルの葉とする解釈はオードの持つ詩的生命力を再生させる助けになってはいないか。というのも、パーシーは評論『詩の弁護』(*A Defence of Poetry*)で、詩的想像力が社会にもたらす効能を論じ、詩的生命力が死と再生のサイクルを辿ると指摘しているからである。パーシーによると、詩人の言葉は「非常に比喩的(vitally metaphorical)」で、まだ認識されていない関連性を結びつけることで新たに「統合された思想の図(pictures of integral thoughts)」を完成させることができる、と言う(P. B. Shelley, *A Defence of Poetry* 512)。¹⁶ しかし、この統合性は時を経て崩れ「思想の断片や分類を表す記号(signs for portions or classes of thoughts)」、すなわち抽象概念となってしまう(*Defence* 512)。つまり、「新たな詩人(new poets)」がその断片化した「関連性を再生させる(create afresh the associations)」ことがなければ詩的生命は朽ち果ててしまうことになる(*Defence* 512)。言い換えれば、新たな詩人が過去の詩人の言葉を解

釈して新しい意味を発見することで詩は再生して「人間の交流といった高貴な目的すべて (all the nobler purposes of human intercourse)」に叶うようになる (*Defence* 512)。この過去の詩人としてパーシーが念頭に置いていたのはダンテやミルトンなどだが、現在の我々から見て、この過去の詩人のひとりとしてパーシーを当てはめて考えてみることはできないだろうか。つまり、パーシーの言葉から新しい意味を発見してくれる者がいなければ、その詩的生命力は潰えてしまうことになる。「西風に寄せるオード」において詩人（ひいてはパーシー自身）は世界を啓発するため、言の葉に載せて火花と灰をばら撒く。この行為を『詩の弁護』で言う「人間の交流といった高貴な目的」と考えると (*Defence* 512)、このオードから新たな意味を発見する者が出現しなければ「西風に寄せるオード」は世界を啓発する詩的生命力を失う。この新たな意味を発見する者を狭義の意味での詩人に限定せず、理想の読者に拡大して捉えたと「西風に寄せるオード」における枯葉は比喩的であるため、チャンドラーやフライが認識されていない関連性を〈枯葉〉とシビルの葉の間で結びつけたことになる。¹⁷ しかし、「西風に寄せるオード」の枯葉にシビルの葉の意味を見出した作品がチャンドラーやフライ以前にすでに存在する、と本稿は立証したい。そして、その作品が「西風に寄せるオード」に新たな詩的生命力を吹き込んでいと考察していく。だが、この作品と「西風に寄せるオード」のつながりを検証する前に「西風に寄せるオード」がばら撒く火花と灰が詩的生命力と関連して死と再生のサイクルに関わっていることを考察していく。

1817年執筆の物語詩『レイオンとシズナ』 (*Laon and Cythna; Or the Revolution of the Golden City: A Vision of the Nineteenth Century. In the Stanza of Spenser*) の序文や第9編におけるシズナの発言からもわかるように、「西風に寄せるオード」執筆時のパーシーは、社会改革の要として社会への単なる反逆よりも、愛をもって社会に変革の春を到来させることに重きを置いていた。¹⁸ 実際、「西風に寄せるオード」における西風は、「破壊者 (Destroyer)」であると同時に「保存者 (Preserver)」であり、冬をもたらず厳しい風であるだ

けではなく、春をもたらす優しい風である(“Ode” 1.14)。また、パーシーにとって世界を啓発して変革をもたらす火や光は愛を表す。¹⁹ 例えば、『詩の弁護』においてパーシーはダンテを偉大な詩人として評価し、その功績は混乱の最中にあったヨーロッパ世界を最初に啓発したことにあるとする。つまり、ダンテは「最初の宗教改革者 (the first religious reformer)」であり、まさに暗闇を照らすルシファーの光である (*Defence* 527-28)。ここで使われているルシファーの比喻は当時の宗教体制に反駁したダンテ像を表しており、そこから発せられる光は愛を意味する。なぜなら、パーシーによると、「ダンテはペトラルカよりも愛の秘密を理解しており (Dante understood the secret things of love even more than Petrarch)」、彼の『神曲』における天国篇は「永遠の愛を詠った不滅の讃歌である (a perpetual hymn of ever-lasting love)」としているからである (*Defence* 525, 526)。しかし、ダンテの言う愛は世代を経て、体系化したキリスト教(カトリック)によって「歪められた概念 (The distorted notions)」となり、「くるんで覆い隠されて (enveloped and disguised)」しまっている (*Defence* 526)。つまり、パーシーの時代、ダンテの詩的生命力は死んだ状態にあり、世代を超えて読者がダンテから啓発の火花を受けるには、その「歪められた概念」に隠された意味を発見して、その詩的生命力としての稲妻を導く「伝導体 (conductor)」が必要である (*Defence* 526, 528)。

His [Dante's] very words are instinct with spirit; each is as a spark, a burning atom of inextinguishable thought; and many yet lie covered in the ashes of their birth, and pregnant with a lightning which has yet found no conductor. (*Defence* 528)

ダンテの言う愛を火花とすると、灰はその火花を歪めた解釈へと導いてしまう覆いである。灰に覆われたままの火花は詩的生命力が死んだ状態だが、伝導体によって火花は再生する可能性を秘めている。火花と灰のイメージは、「西風

に寄せるオード」においても見られ、『詩の弁護』における火花と灰に通じる意味合いで用いられていると解釈できないか。というのは、ダンテの言葉に秘められた火花が連想させるのは、「西風に寄せるオード」の最終連で詩人の言の葉に載せてばら撒かれる「火花 (sparks)」だけではないからである (“Ode” 5.67)。ダンテの火花は灰に潜在的に含まれて案内役によって開花する「稲妻 (a lightning)」でもある (*Defence* 528)。この稲妻は「西風に寄せるオード」の第2連の後半で描写される稲妻を連想させる。「西風に寄せるオード」第2連において、雲は枯葉の類型パターンとして描かれるが、その雲は「雨と稲妻の先触れ (Angels of rain and lightning)」であり、「黒い雨と火 (Black rain, and fire)」をもたらす (“Ode” 2.18, 28)。また、パーシー自身、ダンテを模倣すべき偉大な詩人として位置付け、「西風に寄せるオード」における各連14行のソネット形式はダンテのテルツァ・ライマを模倣している。²⁰ こうしてみると、「西風に寄せるオード」における詩人がダンテをモデルとして愛の火花を世界へとばら撒き、人類を理想の社会へと啓発させようとする「伝導体・案内役 (conductor)」であったとしても不思議はない (*Defence* 528)。そうすると、「西風に寄せるオード」において火花と灰がともに枯葉に載せてばら撒かれるのは、示唆的である。詩人の言葉が歪められる (死の) 可能性があったとしても、そこから新たな意味が発見される (再生の) 可能性を導き出す<案内役>が必要である。

3. 「西風に寄せるオード」と『最後の人間』の類似性

では、パーシーの言の葉に新たな意味を付与する案内役は誰かという問題に戻りたい。パーシーによる作品を死後そのまま捨て置かず、編纂・出版したのは、妻メアリである。²¹ 但し、「西風に寄せるオード」は1819年秋の執筆で翌年20年の出版であるため、メアリによる死後編纂とは直接関係しない。しかし、マリイの『最後の人間』は「西風に寄せるオード」の案内役になっている

可能性が高い。まず、小説の序文において、メアリを思わせる一人称の語り手がパーシーと思しき連れとともに、1818年12月8日にナポリ (Naples) にある「ベイイの海岸 (the shores of Baiae)」を訪れる (*The Last Man* 5)。ふたりがシビルの洞窟を見つけて中に入ると、未来の預言が記された「シビルの葉 (Sibylline leaves)」が「ばら撒かれている (strewn about/ Scattered)」のが目に入り、回収して内容を翻訳していく (*The Last Man* 7, 7, 8)。このシビルの葉を翻訳・編集したものが『最後の人間』の本体物語、つまり主人公ヴァーニー (Verney) の物語なのである。そして本体物語はヴァーニーの語りで行っていく。確かにメアリが、ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer)、フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney)、ジョン・ミルトン (John Milton) の流れを汲む予言文学やイギリス・ロマン派詩人 S. T. コウルリッジ (S. T. Coleridge) による1817年出版の詩集「シビルの葉」(“Sybilline Leaves”) を意識して、シビルの葉を小説の序文に登場させた可能性を完全に打ち消すことはできない。²² しかし、『最後の人間』の序文においてシビルの葉は未来の預言であると同時に、「古代ローマの詩人 (the Latin poet)」の手による「韻文 (verses)」であり、それがばら撒かれた状態であった点に注目すると、このシビルの葉のモチーフにはパーシーの「西風に寄せるオード」第5連における、詩人のばら撒かれた言の葉 (預言) を連想させる (*The Last Man* 8)。さらに、メアリは序文の時代設定を1818年冬にし、場所をナポリのベイイにしている。²³ この12月という季節感が「西風に寄せるオード」と類似していることに加え、このオード執筆の1819年10月にも近い。そして何より、パーシーの「西風に寄せるオード」第3連にも「ベイイの湾 (Baiae's bay)」への言及が見られ、その海に西風が吹いて海底の植物もその葉を散らす様が描かれている (“Ode” 3.32)。このような材料が揃うと、メアリは自らの想像力を働かせ、パーシーの「西風に寄せるオード」における枯葉 (パーシーのシビルの葉) のイメージを踏襲し、メアリのシビルの葉、すなわち『最後の人間』を執筆した、と解釈したい誘惑に駆られる。言い換えると、このシビルの葉のモチーフがメアリ

の『最後の人間』とパーシーの「西風に寄せるオード」を詩的想像力によって結びつけ、相互に文学的価値を与えているのではないか。

このような解釈をいざなう材料は他にもある。本小説執筆時のメアリはパーシーとのつながりを強く意識して、1824年5月14日に、パーシーやバイロンよりも生きながらえた自らを「最後の人間 (The last man)」に喩えている (*Journals* 476)。ゆえに、『最後の人間』においてメアリは主人公ヴァーニーを自らに見立てていると考えてよい。そして、パーシーをモデルにした登場人物エイドリアン (Adrian) を創作する。物語はヴァーニーの父親が没落する過程が描かれるところから始まり、ヴァーニーは自分の父親がエイドリアンの父親から受けた仕打ちを恨みに思いながら、羊飼いとて文明とは無縁の生活を送っていることが説明される。しかし、エイドリアンに邂逅した際、ヴァーニーの気持ちに変化が生じる。エイドリアンは父親同士の不和についてヴァーニーの誤解があったこと、ヴァーニーを友人として考えていたことを説明する。そして、そんなエイドリアンの風貌そのものが、ヴァーニーの「心曇らせる怒り (cloudy wrath)」を「優しい西風 (gentle western breath)」で吹き飛ばした結果、ヴァーニーの心には「愛情の流れが吹き出して (the stream of affection gushed forth)」、ついには文学的感性さえも引き継ぐことになる (*The Last Man* 23, 23, 25)。同時に、エイドリアンの西風の力がヴァーニーに影響を与えたのに対応するように、感極まったヴァーニーが走り回る丘にも「西風が吹き抜けた (a west wind swept them [the hills])」とある (*The Last Man* 26)。このように、エイドリアンの力は西風の力に喩えられ、それによってヴァーニーの怒りは破壊されて「新たに生まれ変わり (was born anew)」、「愛と無垢の新たな経歴 (a new career in innocence and love)」の人生を始めることになる (*The Last Man* 26)。このようなエイドリアンの影響力には、パーシーの想像力が持つ特質が見られる。例えば、エイドリアンの特質を描写する「インスピレーションを受けた音楽家 (an inspired musician)」や「『精神の豎琴』 (the “lyre of mind”）」、「神のようなハーモニー (divine harmony)」は、パーシーの作品に

おける理想の詩人像と合致するからである (*The Last Man* 24)。²⁴ そして、エイドリアンがヴァーニーに話しかける声は、まるで「最も甘美なメロディー (sweetest melody)」のようであり、ヴァーニーの精神に静かなこだまして、体の奥深くにある「生命の血液 (the life-blood)」を沸騰させる (*The Last Man* 24)。エイドリアンからヴァーニーに与えた影響の中に「火花」という言葉は使われていないが、ヴァーニーの血液を沸騰させるイメージはヴァーニーの精神に火をともしイメージにつながる。エイドリアンのモデルがパーシーである以上、エイドリアンにロマン派的想像力の特徴や愛の影響力が備わっているのは当然である。しかし、エイドリアンがヴァーニーに与えた影響力は西風に喩えられ、その影響力によってヴァーニーの怒りが破壊されて精神的再生を経験し、愛の火を精神に灯すことになるのは極めて示唆的である。

ヴァーニー＝エイドリアンがメアリ＝パーシーに対応するのだとすると、パーシーが「西風に寄せるオード」に載せてばら撒いた愛の火花はメアリのものにも届き、詩的インスピレーションを受けて『最後の人間』が執筆されたとしても不思議はない。メアリはパーシーの死後、彼の寛容さや愛の精神を思い返し、彼への愛を糧に夫の死を乗り越えようとしていた。²⁵ メアリのジャーナルには興味深い記述がある。例えば、メアリはパーシーの死後、彼のイメージを徐々に神格化していき、1823年2月17日にメアリはパーシーを「私にとっての太陽 (the sun of my existence)」であり「人生における火花 (the animating spark of my life)」だと述べている (*Journals* 452)。²⁶ さらに1822年12月に、メアリは愛があれば、死さえも自分の中で燃え続ける「生きた火花 (that living spark)」を奪うことはできないと説明している (*Journals* 447)。同様の構図は『最後の人間』におけるヴァーニーとエイドリアンの関係にも見られる。ヴァーニーはエイドリアンに感化され、文学に没頭して豊富な読書体験を積み、「著作業に目を向け (turned author myself)」始める (*The Last Man* 122)。つまり、エイドリアンの詩的想像力はヴァーニーに受け継がれ、その詩的想像力を使ってヴァーニーは『最後の人間』の語りを始める。小説の終盤に進むと、

全人類が疫病に罹り、エイドリアンをはじめとする仲間も水難事故で亡くしヴァーニーは人類最後の生き残りとなる。誰もいなくなったローマに行きついたヴァーニーは、とある民家の書斎に入り、「ばら撒かれた(scattered about)」原稿を見つける(*The Last Man* 361-62)。このばら撒かれた原稿こそが、ヴァーニーの執筆を決意させる契機となっているのである。ここでメアリは直接 leaves という単語を用いているわけではないが、語り手ヴァーニーにとって物語執筆の契機となるこの場面は、序文の物語において語り手が洞窟でばら撒かれたシビルの葉を発見する場面と緩やかに対応している。²⁷ なぜなら、いずれの場面もばら撒かれた言の葉からインスピレーションを受けて、語り手たちは執筆・編集作業に入っていくことになるからである。そうすると、パーシーによってばら撒かれた言の葉に込められた愛の「魔力 (incantation)」はメアリの小説内で回収されて再び火花として再生したと解釈することはできないだろうか (“Ode” 5.65)。

4. 案内人としてのメアリ

本稿はこれまで『最後の人間』と「西風に寄せるオード」のつながりを考察してきた。一方で、先行研究において本小説からロマン派的想像力の挫折を読み取る批評家もいる。²⁸ このセクションではこの点に留意して、最終的に『最後の人間』と「西風に寄せるオード」のつながりを立証したい。『最後の人間』においてローマでひとりになったヴァーニーは自らの物語執筆に取り組み、仲間といるような感覚に囚われ仮初にも孤独感が癒される。だが、執筆が終わるとヴァーニーは再び深い孤独感に陥る。ヴァーニーが人類最後の生き残りであるといった事実は詩的想像力によっても動かしがたく、彼の孤独感は想像力によって完全に救われるわけではない。ヴァーニーの詩的想像力はエイドリアンによって目を覚まし培われたもので、彼はそのロマン派的想像力を自らの活動源にしていこうとする。その一方で、彼はそんなロマン派的想像力が隆盛を極

めたひとつの時代が終わりを迎えたことを目の当たりにして絶望するのである。疫病感染を拡大させる風を描いた箇所も同様である。『最後の人間』第2巻第5章で語り手は、太陽が風よりも力を持つとする寓話は「理にかなっていない (unjust)」として、風が太陽や雲、海を支配する力を持つと説明する (*The Last Man* 181)。そして、その強大な風に対して語り手は、「西風に寄せるオード」の詩人と同様に、汝 (thou) と呼びかけた後、“whether thou comest destroying from the east, or pregnant with elementary life from the west”と、生命をもたらす西風と、破壊 (疫病) をもたらす東風の両方を念頭に置いて風の特質を描いている (*The Last Man* 181)。西風の特質については具体的には、雲を引き連れ、海や地上、オークの木に吹きかけ、雪や霜、雪崩を引き起こし、風の「優しい支配 (gentle governance)」下でつぼみと葉が生み出されて繁茂していくさまが描かれる (*The Last Man* 182)。このあたりの描写はパーシーの「西風に寄せるオード」に類似して、西風が自然界に冬から春へのサイクルー死から再生へのサイクルーをもたらす様子を表している。²⁹ だが、興味深いことに『最後の人間』においては西風の生命をもたらす特質が描かれた後に、疫病をもたらす東風の破壊的側面が強調されている。

Why dost thou howl thus, O wind? By day and by night for four long months thy roarings have not ceased – the shores of the sea are strewn with wrecks, its keel-welcoming surface has become impassable, the earth has shed her beauty in obedience to thy command; the frail balloon dares no longer sail on the agitated air; thy ministers, the clouds, deluge the land with rain; rivers forsake their banks; the wild torrent tears up the mountain path; plain and wood, and verdent dell are despoiled of their loveliness; our very cities are wasted by thee. Alas, what will become of us? It seems as if the giant waves of ocean, and vast arms of the sea, were about to wrench the deep-rooted island from its centre; and cast it, a ruin and a

wreck, upon the fields of the Atlantic. (*The Last Man* 182)

語りの流れとしては、西風の肥沃な側面を覆すかのように、疫病を拡大させて町を荒廃させる東風の負の勢力に焦点が当てられ、語り手の想像力も何の効力もないことが強調される。『西風に寄せるオード』において西風が破壊と保存の両面を持ち合わせて破壊から再生へと繋がるサイクルを形成していたのに対し、『最後の人間』においては季節のサイクルをもたらず西風が描写された後、町に疫病をもたらし世界を荒廃させていく東風の破壊的側面が強調される。この東風が破壊をもたらしただ後に町に残るのは、いわば大西洋に浮かぶ「残骸と難破物 (a ruin and a wreck)」のようなものであり、そこでは「人間は無意味へと帰してしまう (man shrinks into insignificance)」(*The Last Man* 182)。つまり、『最後の人間』における東風は、「西風に寄せるオード」における西風と違って、破壊のあとに虚無をもたらず。したがって、語り手はただ東風に向かっていただけに「なぜ汝はこんなふうになるのだ、風よ (Why dost thou howl thus, O wind?)」と問いかけるのみで、「ああ、私たちはどうなるのか (Alas, what will become of us?)」と嘆く他に手立てはない (*The Last Man* 182)。ロマン派的想像力でさえも、疫病をもたらず風に対抗する術はないのである。

風をもたらず疫病のモチーフは、パーシーによる『レイオンとズズナ』におけるペストの描写が想起される。レイオンらによる反乱が挫折した後、疫病が人類に襲い掛かる (10. 20. 3964)。疫病におびえる人々の怒りの矛先はレイオンとズズナへと向かい、ふたりは火あぶりの刑にされる。しかし、パーシーは未来への希望をわずかに残して作品を締めくくる。火あぶりで処刑されたレイオンとズズナは失ったこどもと再会を果たして、「もう疫病をおそれることのない (may fear not now the Pestilence)」天上の館へと向かう (12. 29. 4702)。このように死後の世界においてレイオンは愛を獲得することになるが、レイオンを導くのは愛の預言者ズズナである。第9歌においてズズナは、レイオンとズズナの死後、その思想は生き残り人々に伝えられる

のだという。つまり、レイオンに「今は世界の冬 (This is the winter of the world)」であり、「春がやって来る (Spring comes)」という (9. 25. 3685, 3688)。この冬から春への再生のイメージは、「西風に寄せるオード」にも受け継がれており、『レイオンとシズナ』の第9歌が「西風に寄せるオード」の直接的執筆動機となっていることを考慮に入れると、未来における理想の社会実現の可能性をわずかに残すパーシーの作品と『最後の人間』とのコントラストをメアリは意識していたはずである。こうして見ると、パーシーの西風が包含する詩の「魔力 (incantation)」は仮にメアリの小説の中に取り込まれたとしても、その愛の火花はかき消されてしまっているように思われる (“Ode” 5.65)。

しかしながら、このような風の描写は『最後の人間』の結末ではない。むしろ『最後の人間』の結末は西風のロマン派的想像力をないがしろにしていない。ヴァーニーは物語の最後までロマン派的気質を失わず、こだわりを持ち続ける。例えば、自分の物語を振り返ってヴァーニーは“I lingered fondly on my early years”と、疫病が流行する前の幸せな時期に多くの紙面を費やしてしまったことを反省する (*The Last Man* 362)。つまり、ヴァーニーは動詞 *linger* を用いて、エイドリアンをはじめとする亡くなった仲間へのこだわりと哀惜を表している。さらに、小説の結びでヴァーニーは孤独に耐え切れず、「天のそよ風に従って (obeying the breezes of heaven)」ローマを出奔して人類の生き残りを探そうとする (*The Last Man* 364)。ヴァーニーの計画では、地中海からナポリを通過して、イタリア南西部のカラブリア (Calabria)、マルタ (Malta)、エーゲ海のキラデス諸島 (Cyclades) を通り、小アジア (Asia Minor)、シリア (Syria)、ナイル (the Nile) を横断して「ヘラクレスの柱 (the pillars of Hercules)」へ向かうことになる (*The Last Man* 364)。つまり、ヴァーニーはシリアまでは東の方角を目指し、西風に乘っていくことになる。ここでヴァーニーを突き動かすものはもはや希望でも喜びでもなく、絶え間なくつきまとう絶望と変化への渴望である。それでもやはり、西風にのって東へと向かうヴァーニーは水難のリスクを背負いながら、「虹の中に前兆を、雲の中に [嵐の] 脅

威を読み取ろう (I shall read fair augury in the rainbow – menace in the cloud)」とする (*The Last Man* 365)。このようなヴァーニーの姿勢は示唆的である。特に雲の中に嵐の気運を読み取ろうとする姿勢は、パーシーの「西風に寄せるオード」第2連後半における雲と嵐の描写と重なる。³⁰ ヴァーニーが雲の中に読み取ろうとする脅威を稲妻 (lightning / fire) と考えれば、彼はロマン派的想像力の火花にこだわり模索し続けることになる。このように結末においてヴァーニーが描く「無謀な夢 (wild dreams)」には、“they [wild dreams] have ruled my imagination”とあるように、ヴァーニーの想像力を支配する力がある (*The Last Man* 365)。つまり、ヴァーニーはロマン派的想像力を捨てることのできないのである。

同様に、このような想像力の火は小説の序文にも見られる。序文の語り手によると、シビルの葉は「ばら撒かれてつながりが不明な (Scattered and unconnected)」断片であるため、序文の語り手が加筆をおこなったと言う (*The Last Man* 8)。この翻訳作業は、「サン・ピエトロ大聖堂にあるラファエルの絵画『変容』を複製したモザイクの断片 (the mosaic copy of Raphael's Transfiguration in St. Peter's)」のようなもので、加筆によって翻訳家独自の「精神や才能 (mind and talent)」、すなわち詩的想像力が吹き込まれる (*The Last Man* 8)。語り手は連れの亡き後もこの翻訳作業にこだわって携わり続けることで、「想像力と力で火がともされる (glowing with imagination and power)」 (*The Last Man* 8)。つまり、『最後の人間』において、ヴァーニーも序文の語り手も、ロマン派的想像力の終焉に意識を向けながら、自らはロマン派的想像力を捨てきれず、むしろその想像力を糧に作家活動を続けるのである。また、ヴァーニーの物語は2100年の未来に人類最後の人間になった者によって語られる物語のため読者は持たないはずである。しかし、1818年にシビルの洞窟を訪れた序文の語り手が翻訳・編纂することで、物語はヴァーニーから見て過去にはあるが、読者を存在させる。そうすると、序文の語り手にしても、ヴァーニーにしても、その想像力は挫折していない。つまり、ロマン主義時代が終焉を迎える中、メ

アリはパーシーの西風を変容させて小説の中で愛の火花を再生させたのである。

結 び

1822年にパーシーが亡くなり、その友人バイロンも続いて1824年にギリシア独立戦争中に病死する。このような当時の時代の流れから見ると、ロマン派の想像力は終焉を迎えたように見えたかもしれない。そして、このような時代の流れは、メアリにシェリー・サークルの最後の生き残りとして自覚させ、『最後の人間』でロマン派的想像力の終焉を描かせる契機のひとつとなったとしても不思議はない。こうしてみると、『最後の人間』はメアリの預言(シビルの葉)として、パーシーのシビルの葉に含まれた愛の火花を否定的に捉えているというよりもむしろ、パーシーの火花が消滅することへの底知れない不安を表していると考えてもいいだろう。『最後の人間』における結末で、ヴァーニーがロマン派的想像力にこだわりを持ちながら海へと新たな旅路に出ることは示唆的である。つまり、メアリはパーシーの詩的想像力とともに新たな時代へと入っていく不安と決意を『最後の人間』で描いたことになる。つまり、パーシーの「西風に寄せるオード」がメアリの『最後の人間』に西風(新たなインスピレーション)を吹き込み、パーシーの死後、その精神を理想化して書きとどめさせたのである。また、これまで検証してきたように、パーシーの「西風に寄せるオード」の枯葉はメアリの『最後の人間』によって、本来作品中では言及されていないシビルの葉への連想が促され、その比喩的意味がより重層化する。言い換えると、パーシーの「西風に寄せるオード」もメアリの小説によって新たな意味づけを与えられ、その詩的生命を新たにするのである。「西風に寄せるオード」が『最後の人間』に与える影響力、及び『最後の人間』が「西風に寄せるオード」に与える影響を鑑みると、「西風に寄せるオード」はパーシーが晩年に表した想像力への不信感を払拭するほどの力を持って、その詩的生命力の不滅性を立証している。

Notes

- ¹ 本論考は日本シェリー研究センター第28回大会（2019年12月7日、於帝京大学）でのシンポジウム・パネリストとしての発表を加筆・修正したものである。
- ² 批評家は「西風に寄せるオード」と『縛りを解かれたプロメテウス』などの同時期に書かれた作品やそれ以前の作品と比較して、P.B. シェリーの詩的想像力の一端を論じてきた。Blank 197-98, 202, 212-15を参照。Wasserman 222, 239-40, 243, 247; Kapstein 1074-76; Reiter 231; Cronin 233; Chandler 535-38; 548; 551-52; Curran 168; Bloom 75-76, 88-89もまた参照。
- ³ 例えば、Paley 112-16, 121; Mellor, Introduction. *The Last Man* xv; Lokke 117-18; Melville 140; Sambrook 32など。Cantor 194もまた参照。
- ⁴ 例えば、Hugh 322-23; Mellor, “Frankenstein, Racial Science, and the Yellow Peril” 9-10; Donahue 232; Moreno 76-77など。
- ⁵ 同様に、「西風に寄せるオード」の結びがオープンエンディングで読者の解釈にゆだねられている点でメアリの『最後の人間』と類似することを指摘する批評家や、『最後の人間』が「西風に寄せるオード」における風の肯定的影響力をネガティブなものに反転させていると解釈する批評家がいる。Donahue 232とMoreno 76-77を参照。
- ⁶ *Poems* III, 204n を参照。
- ⁷ 以下、“Ode”と略記。
- ⁸ Wasserman 239-41, 247を参照。Kapstein 1070-71; Curran 162もまた参照。
- ⁹ Wasserman 243-44などを参照。
- ¹⁰ Reiter 230-31を参照。
- ¹¹ Blank 217, Wasserman 240を参照。また、第1連の枯葉と第3連における海底の植物はパラレルに描かれている。*Poems* III, 204n を参照。
- ¹² Blank 209-210, 212, 216-17; Behrendt 218-19; Fry 209; Cronin 240; Curran 168などを参照。
- ¹³ Blank 217. *OED*, “leaf.” def. I. 1.a., 3. a., II. a. もまた参照。
- ¹⁴ Fry 209を参照。
- ¹⁵ Chandler 550とFry 209を参照。
- ¹⁶ 以下、*Defence* と略記。
- ¹⁷ 『詩の弁護』においてパーシーが問題にしているのは形象としての詩だけではなく、社会革新の萌芽と、人間同士の精神をつなげる特質を備えた文学全般である。したがって、『詩の弁護』における〈新しい詩人〉とは文学者全般をも指し得る。

Defence 522を参照。

¹⁸ 例えば *Laon and Cythna*, preface 47; 9.22.3658, 9.23.3667, 9.3641, 3685を参照。また「西風に寄せるオード」とほぼ同時期に書かれた『縛りを解かれたプロメテウス』もまた社会改革の要として愛の重要性を主張している。Abrams 299, 301; Bodkin 253などを参照。

¹⁹ 例えば *Prometheus Unbound* 2.5.40, 2.4.128など。

²⁰ Chandler 551と Hogle 5を参照。

²¹ *Journals* 434, 444を参照。

²² Ruppert 142-43, 146-47を参照。メアリは1826年1月28日にジョン・ハワード・ペイン宛の書簡で『最後の人間』を「私のシビルの葉 (my Sibylline Leaves)」と呼んでいる。*The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley* 508を参照。

²³ 1818年12月にメアリはパーシーとともにベイイの海岸を訪れている。*The Letters of Percy Bysshe Shelley* II, 61と *The Journals of Mary Shelley* 242を参照。以下、*Journals* と略記。

²⁴ パーシーの作品に見られる同様の表現については“To the Lord Chancellor”²⁸; *Defence* 511, 516を参照。“Ode” 5.57, 60-61, 69もまた参照。

²⁵ *Journals* 443, 479を参照。

²⁶ パーシーを火や光に喩える箇所については *Journals* 473も参照。

²⁷ Wells 229を参照。

²⁸ 注3を参照。

²⁹ “Ode” 1.6-12を参照。

³⁰ “Ode” 2.27-28参照。ヴァーニーが虹の中に前兆を見出そうとする姿勢はイギリス・ロマン派詩人ジョン・キーツ (John Keats) への典拠であるとする批評家もいる。Cantor 208を参照。Paley 121もまた参照。

Works Cited

Abrams, M. H. *Natural Supernaturalism: Tradition and Revolution in Romantic Literature*. London: Oxford UP, 1971.

Behrendt, Stephen C. *Shelley and His Audiences*. Lincoln: U of Nebraska P, 1989.

Blank, G. Kim. *Wordsworth's Influence on Shelley: A Study of Poetic Authority*. Hong Kong: Mcmillan, 1988.

Bloom, Harold. *Shelley's Mythmaking*. Ithaca: Cornell UP, 1969.

Bodkin, Maud. *Archetypal Patterns in Poetry: Psychological Studies of Imagination*.

- London: Oxford UP, 1934.
- Cantor, Paul A. "The Apocalypse of Empire: Mary Shelley's *The Last Man*" *Iconoclastic Departures: Mary Shelley after Frankenstein*. Eds. Syndy M. Conger, Frederick S. Frank, and Gregory O'Dea. London: Assoc. UP, 1997.193-211.
- Chandler, James. *England in 1819: The Politics of Literary Culture and the Case of Romantic Historicism*. Chicago: U of Chicago P, 1998.
- Cronin, Richard. *Shelley's Poetic Thoughts*. NY: St. Martin's, 1981.
- Curran, Stuart. *Shelley's Annus Mirabilis: The Maturing of an Epic Vision*. San Marino, Huntington Library, 1975.
- Donahue, Luke. "Romantic Survival and Shelley's 'Ode to the West Wind'" *European Romantic Review* 25 (2014): 219-42.
- Fry, Paul H. *The Post's Calling in the English Ode*. New Haven: Yale UP, 1980.
- Hogle, Jerrold E. *Shelley's Process: Radical Transference and the Development of His Major Works*. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Hugh, J. Luke, JR. "The Last Man: Mary Shelley's Myth of the Solitary" *Prairie Schooner* 39 (1965): 316-27.
- Kapstein, I. J. "The Symbolism of the Wind and the Leaves in Shelley's 'Ode to the West Wind'" *PMLA* 51 (1936): 1069-79.
- "Leaf." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Lokke, Kari E. "The Last Man." *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Ed. Esther Schor. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 116-34.
- McWhir, Anne. "Mary Shelley's Anti-Contagionism: *The Last Man* as 'Fatal Narrative'" *Mosaic: An Interdisciplinary Critical Journal* 35 (2002): 23-38.
- Mellor, Anne K. Introduction. *The Last Man*. By Mary Shelley. Ed. Hugh J. Luke, Jr. Lincoln: U of Nebraska P, 1993. vii-xxvi.
- . "Frankenstein, Racial Science, and the Yellow Peril" *Nineteenth-Century Contexts* 23 (2001): 1-28.
- Melville, Peter. *Romantic Hospitality and the Resistance to Accommodation*. Waterloo: Wilfrid Laurier UP, 2007.
- Moreno, Beatriz González. "Breaking Aesthetics and Universalising Plague in Mary Shelley's *The Last Man*" *Odisea* 5 (2004): 71-80.
- Paley, Morton D. "The Last Man: Apocalypse without Millennium." *The Other Mary Shelley: Beyond Frankenstein*. Eds. Audrey A. Fisch, Anne K. Mellor and Esther H. Schor. Oxford: Oxford UP, 1993. 107-23.
- Reiter, Seymour. *A Study of Shelley's Poetry*. Albuquerque: U of New Mexico P,

- 1967.
- Ruppert, Timothy. "Time and the Sibyl in Mary Shelley's *The Last Man*." *Studies in the Novel* 41 (2009): 141-56.
- Sambrook, A. J. "A Romantic Theme: *The Last Man*," *Forum for Modern Language Studies* 2 (1966): 25-33.
- Shelley, Mary. *The Journals of Mary Shelley*. Eds. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987.
- . *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Eds. Jane Blumberg and Nora Crook. Vol.4. London: Pickering, 1996.
- . *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. Ed. Betty T. Bennett. Vol.1. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- Shelley, Percy Bysshe. "Ode to the West Wind." *The Poems of Shelley: 1819-1820*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. Vol.3. Harlow: Longman, 2011. 200-12.
- . "Laon and Cythna; Or, the Revolution of the Golden City: A Vision of the Nineteenth Century." *The Poems of Shelley: 1817-1819*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. Vol.2. Harlow: Longman, 2000. 10-260.
- . "Prometheus Unbound: A Lyrical Drama in Four Acts." *The Poems of Shelley: 1817-1819*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. Vol.2. Harlow: Longman, 2000. 456-649.
- . "To the Lord Chancellor." *The Poems of Shelley: 1817-1819*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. Vol.2. Harlow: Longman, 2000. 496-501.
- . "A Defence of Poetry." *Shelley's Poetry and Prose*. Eds. Donald H. Reiman and Neil Fraistat. NY: Norton, 2002. 35. 509-
- . *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Frederick L. Jones. Vol.2. Oxford: Oxford UP, 1964.
- Wasserman, Earl R. *Shelley: A Critical Reading*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.
- Wells, Lynn. "The Triumph of Death: Reading and Narrative in Mary Shelley's *The Last Man*." *Iconoclastic Departures: Mary Shelley after Frankenstein*. Eds. Syndy M. Conger, Frederick S. Frank, and Gregory O'Dea. London: Assoc. UP, 1997. 212-34.

P. B. Shelley's "Ode to the West Wind" and Sibylline Leaves: Mary Shelley as a Conductor

IKEDA Keiko

P. B. Shelley's "Ode to the West Wind" was written in 1819 wherein he describes the poetic imagination as the positive power of social renovation. On the other hand, Mary Shelley's *The Last Man*, written in 1824, describes the failure of the Romantic imagination. The theme of each work is quite different, but these two works have some similarities of images and metaphors. Critics have already pointed out the influence of P. B. Shelley's "Ode to the West Wind" upon Mary Shelley's *The Last Man* in detail. Especially, Anne MacWhir interprets that *The Last Man* inherits the motif of the wind bringing the plague in order to undermine the positive power of the imagination. In this essay, I will examine the similarities between "Ode to the West Wind" and *The Last Man*. On the basis of the examination, I will confirm that these two works give literary valuation to each other. From hereon I will refer to P. B. Shelley as Percy and Mary Shelley as Mary.

First of all, I will look at the meaning of the west wind's power and the dead leaves. The west wind, whose power is ambivalent, brings both the arrival of winter (destruction) and spring (revival) into the natural world. Thus, it encourages the dead leaves to become nutrients for the seeds scattered in the soil and to revive them as spring plants. From the second to the third stanzas, the similar patterns of the dead leaves can be seen in other natural things such as clouds and the sea influenced by the west wind. In the fourth and fifth stanzas, the meaning of dead leaves becomes more metaphorical. The relationship between the dead leaves and the west wind is equivalent to that of the poet and the west wind because Percy compares the poet to the dead leaves in the fourth stanza. In the fifth, the leaves refer to the poet's thought and then to the

pages of his book which contain his thought. Finally, the poet's words in a book, that is "Ode to the West Wind" itself become a prophecy for the future to scatter ashes and sparks over the world.

James Chandler interprets the leaves in "Ode to the West Wind" as Sibylline leaves since the poet's words are a prophecy for the future. However, I will confirm this in the following section: One poet has already interpreted the leaves in the ode as Sibylline leaves to inspire a new poetical life into the ode. Before the confirmation, I will consider the meaning of ashes and sparks scattered in "Ode to the West Wind". A similar image of ashes and sparks can be found in *A Defence of Poetry* which describes Dante as the ideal poet inspiring the world with love. At the same time, if Percy emphasizes that a conductor encourages readers to be inspired by Dante, we need a conductor to be inspired by the sparks of "Ode to the West Wind".

Mary is Percy's ideal conductor, having edited and published his works after his death. "Ode to the West Wind" is irrelevant to Mary's posthumous publication, but there are two reasons why I assume that *The Last Man* is a conductor for the ode. First, the scattered Sibylline leaves in the preface of the novel remind us of the poet's scattered words of leaves in the fifth stanza in "Ode to the West Wind". Secondly, the main character in *The Last Man*, Verney is modelled on Mary and his friend, Adrian is Percy. Adrian's spirit is compared to the west wind which kindles affections in Verney. Thus, after Percy scatters sparks of love in his words (Sibylline leaves), the sparks are collected and rekindled in Mary's novel.

In conclusion, *The Last Man* does not simply describe the failure of the Romantic imagination, but also plays an important role of conducting readers to the new significance of Percy's ode. At the same time, Percy's ode also rekindles Mary's imagination to create the literary world of *The Last Man*.